

【要旨】

保安語積石山方言では、「得る」を出自に持つ動詞 *olə* が人間の出生に関わる「生まれる」と「産む」をともに表す。特に注目されるのは「生まれる」を表す場合であり、筆者の現地調査に従うと、「生まれる人」を表示する格は話者の居住地によって少なくとも三つのタイプに区分される。タイプ1は行き来はあるが保安族の村を離れて数十年が経つ話者によって用いられ、「生まれる人」を1人称と2人称は対・与位格、3人称と固有名詞と人間名詞は対格で表示している。タイプ2は保安族の村に暮らす話者によって用いられ、タイプ1の状況に加え、主格でも表示している。タイプ3も保安族の村に暮らす話者が用いているが、タイプ2とは異なり、3人称と固有名詞と人間名詞は主格でのみ表示している。こうした格表示から「生まれる」を表す動詞 *olə* は、タイプ1は他動詞と言える。他方、タイプ2とタイプ3はタイプ3がより進んでいるが他動詞から自動詞への移行過程にあり、その要因として漢語との接触が考えられる。

0. はじめに

保安語積石山方言とは、中国の甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治州県に暮らす保安族20,074人(2010年)が話しているモンゴル系の言語である¹⁾。保安語積石山方言では、「得る」を出自に持つ動詞 *olə* が(1)のように人間の出生に関わる「生まれる」と「産む」をともに表す。

(1)a. *nadə dadundə olsaŋni.*

私(対・与位格) 大墩で 生まれた 「私は大墩で生まれたのです。」

b. *bu danəhoŋ nə agunə olsaŋni.*

私(主格) 昨年 この 娘(対格) 産んだ 「私は昨年この娘を産んだのです。」

保安語積石山方言の動詞 *olə* は自他同形動詞であろうか。(1)で注目されるのは、動詞 *olə* が「生まれる」を表す(1a)である。(1a)の動詞 *olə* は「生まれる人」を表示する格が示すように、自動詞ではなく他動詞的である。しかも、その「生まれる人」を表示する格は話者の居住地によって異なり、少なくとも三つのタイプに区分できる。

本発表は、以上のような観点から、筆者が現地調査で得た資料に従い(2)を論じる。

(2)a. 話者の居住地に注目し、保安語積石山方言の動詞 *olə* が「生まれる」を表す場合には「生まれる人」

を、「産む」を表す場合には「産む人」と「生まれる人」をどの格で表示するのかを明らかにする。

b. 格表示から、「生まれる」と「産む」を表す動詞 *olə* が自動詞なのか他動詞なのかを明らかにする。

c. 上で明らかになったことを保安語積石山方言の歴史の中に位置づける。

なお、保安語積石山方言には七つの格(主格、属格、対格、与位格、奪格、造格、連帯格)がある。属格と対格と与位格については、表1のように1人称と2人称は対格と与位格が中和し、3人称と名詞は属格と対格が中和している。

表1: 保安語積石山方言の格

	1人称	2人称	3人称	名詞(「娘、女の子」)
主格	<i>bu</i>	<i>tei</i>	<i>dzaŋ / gaŋ</i>	<i>agu</i>
属格	<i>munə</i>	<i>teinə</i>	<i>dzaŋnə / gaŋnə</i>	<i>agunə</i>
対格	<i>nadə</i>	<i>teo(də)</i>	<i>dzaŋnə / gaŋnə</i>	<i>agunə</i>
与位格	<i>nadə</i>	<i>teo(də)</i>	<i>dzaŋdə / gaŋdə</i>	<i>agudə</i>
奪格	<i>nasə / busə</i>	<i>teosə / teisə</i>	<i>dzaŋsə / gaŋsə</i>	<i>agusə</i>
造格	<i>bugalə</i>	<i>teigalə</i>	<i>dzaŋgalə / gaŋgalə</i>	<i>agugalə</i>
連帯格	<i>bugalə</i>	<i>teigalə</i>	<i>dzaŋgalə / gaŋgalə</i>	<i>agugalə</i>

1) 保安語積石山方言は危機言語であり、その話者数は総人口数よりもかなり少ない。保安語積石山方言には大墩方言と甘河灘方言という二つの下位方言があるが、本発表は大墩方言に基づいている。母音は7つ(a,i,u,e,o,ə,ə)、子音は25個(p,b,t,d,k,g,f,v,s,ʃ,c,ç,h,dz,ts,dz,tc,dz,m,n,ŋ,r,l,j)。

1. 先行研究の記述

保安語積石山方言の先駆的な資料としては、Todaeva, B.X. (1964) と布和 劉照雄 (1982) がある。しかし、これらの資料には、布和 劉照雄 (1982) の巻末の語彙集に *olə*-「出生」が記載されているだけであり、「生まれる」と「産む」を表す例文は一文も記載されていない。

保安語には、積石山方言のほかにも青海省黄南藏族自治州同仁県に暮らす土族によって話されている同仁方言がある。この地域的隔たりは、積石山方言の話者が清朝同治年間 (1860 年代) に同仁から積石山に移り住んだことに起因する。保安語同仁方言の「生まれる」を表す表現については、角道 (2018) がモンゴル系言語全体の中で論じている。角道 (2018) は保安語同仁方言の「生まれる」について、陳乃雄等編 (1987) が記した (3) をもとに分析し、保安語同仁方言の動詞「得る」を他動詞と見なすと、生まれる人が斜格 (意味上は対格) になるのは自然であると述べている。

(3) a. *tcinda kətci əlwa?* (陳乃雄等編 1987:8)

あなた (対・与位格) いつ 生まれた 「あなたはいつ生まれましたか。」

b. *mənda ʂdzəggə səmtci səmsəm lə dawa dəmbanə se guraŋda əlwa.* (陳乃雄等編 1987:11)

私 (対・与位格) 1993 年 7 月 3 日に 生まれた 「私は 1993 年 7 月 3 日に生まれました。」

c. *ədzəŋ ŋɣu:nə sarada ca:zingə əldzi.* (陳乃雄等編 1987:14)

彼らは 先 月 子ども (ゼロ対格) 生まれた 「彼らは、先月子どもが生まれました。」

d. *tcinda həla kətci əlwa?* (陳乃雄等編 1987:15)

あなた (対・与位格) どこで 生まれた 「あなたはどこで生まれました。」

e. *mənda ensa xələ gi: bədgəŋ kuər naŋgəda əlwa.* (陳乃雄等編 1987:15)

私 (対・与位格) ここから 遠く ない 小さい町 の中で 生まれた
「私はここから遠くないある小さい町で生まれました。」

ただし、陳乃雄等編 (1987:91) には、「生まれる人」を主格で表示する (4) も記載されている。

(4) *ta guala nəgə həŋ əlwa ja.*

あなたたち 2 人 (主格) 同じ 年に 生まれた のだ 「あなたたち 2 人は同じ年に生まれました。」

そのほかにも同仁方言の資料として布和 陳乃雄 (1981)、Fried, R.W. (2010) があるが、これらにも「生まれる」と「産む」を表す例文は一文もない。

2. 分析の枠組み

保安語積石山方言の動詞 *olə*-は「生まれる」と「産む」をともに表すが、その *olə*-が現れる保安語積石山方言の文型として (5) を考察する。

- | | | | |
|--------|-----------|---------|--------------------|
| (5) a. | 「産む人」 | 「生まれる人」 | <i>olə</i> -「産む」 |
| b. | 「産む人」 | | <i>olə</i> -「産む」 |
| c. | | 「生まれる人」 | <i>olə</i> -「生まれる」 |
| d. | 「産む人の関係者」 | 「生まれる人」 | <i>olə</i> -「生まれる」 |

(5a) と (5b) は動詞 *olə*-が「産む」を表す文型であり、違いは「生まれる人」が文中に現れるかどうかにある。他方、(5c) と (5d) は動詞 *olə*-が「生まれる」を表す文型であり、違いは「産む人の関係者」が文頭に現れるかどうかにある。(5d) は、家族関係の発生を表す。

そして、上に述べたように「生まれる」を表す動詞 *olə*-の「生まれる人」を表示する格表示には話者の居住地によって少なくとも三つのタイプがある。三つのタイプの話者の居住地は (6) のとおりである。

(6) 話者の居住地

タイプ 1 : 県を中心地等の街中。保安族の村、大墩村への行き来はあるが村を離れて数十年が経つ。

タイプ 2 : 保安族の村、大墩村。

タイプ 3 : 保安族の村、大墩村。

3. 動詞 *olə-*が「産む」を表す場合

保安語積石山方言において動詞 *olə-*が「産む」を表す(5a)と(5b)の文型の場合、「産む人」と「生まれる人」を表示する格が話者の居住地によって異なることはない。(1b)から「産む」を表す動詞 *olə-*は他動詞と見てよいが、この点を確認しておく。「産む人」を表示する格は人称詞、固有名詞、人間名詞などを問わず、(1b)のように主格である。タイプ1の話者の例を(7)から(10)に示しておく。(1b)(7)(10)から「生まれる人」をはずしても、適格である。

(7) *tcɪ nadə halə olsaŋni ?*

あなた(主格) 私(対・与位格) どこで 産んだ 「あなたは私をどこで産んだのですか。」

(8) *dzaŋ olgə ʃidze hajim ekədzo.*

彼女(主格) 出産する とき 雷が 鳴っていた 「彼女が産んだとき、雷が鳴っていました。」

(9) *fatume danəhoŋ maroŋ nakədə oltc.*

ファツメ(主格) 昨年 河岸で 産んだ 「ファツメは昨年河岸で産産しました。」

(10) a. *munə agu ounə olsaŋno.*

私の 娘(主格) 男の子(対格) 産んだ 「私の娘は男の子を産んだのです。」

b. *munə agu ou gə oltc.*

私の 娘(主格) 男の子(ゼロ対格) 不定 産んだ

他方、「生まれる人」を表示する格はこれまでの例からもわかるように、1人称と2人称であれば対・与位格、3人称と固有名詞であれば対格である。(11)と(12)をさらに挙げておく。

(11) *nenə tcodə halə olsaŋni ?*

おばあさん(主格) あなた(対・与位格) どこで 産んだ 「おばあさんはあなたをどこで産んだの。」

(12) *bu danəhoŋ fatumenə, dzaŋnə olsaŋni.*

私(主格) 昨年 ファツメ(対格) 彼女(対格) 産んだ 「私は昨年ファツメ、彼女を産みました。」

ただし、「生まれる人」が人間名詞の場合、それを表示する格は(10a)のように対格か、(10b)のように不定を表す *gə* が後置したゼロ対格となる。(10b)は(10a)とは異なり、「男の子」を新情報として談話に導入する点的な表現である。また、(5a)の文型から「産む人」と「生まれる人」の語順を入れ替えても、たとえば(7)は *nadə tcɪ halə olsaŋni?* 「私をあなたはどこで産んだのですか」となる。しかし、「生まれる人」が人間名詞の場合、「産む人」と「生まれる人」の語順を入れ替えると、(10)とは異なり(13)のように対格のみが現れる。文頭に新情報は置かないという情報構造が関わっているのであろう。

(13) a. *ounə munə agu olsaŋno.*

男の子(対格) 私の 娘 産んだ 「男の子を私の娘は産んだのです。」

b. **ou gə munə agu oltc.*

男の子(ゼロ対格) 不定 私の 娘 産んだ

もっともこの *gə* が人間名詞に後置されるかどうかは、動詞 *olə-*に限られるわけではない。

保安語積石山方言の動詞 *olə-*が「産む」を表す場合、それは他動詞であり、(5a)と(5b)の文型で「産む人」と「生まれる人」を表示する格は(14)のようになる。

(14) 「産む人」 (「生まれる人」) *olə-* 「産む」 (他動詞)

主格

対・与位格 = 1人称、2人称

対格 = 3人称、固有名詞、人間名詞

ゼロ対格 *gə* = 人間名詞 (ただし、「生まれる人」「産む人」の語順では不可)

4. 動詞 *olə-*が「生まれる」を表す場合

保安語積石山方言の動詞 *olə-*が「生まれる」を表す(5c)と(5d)の場合、「生まれる人」を表示する格は話者の居住地によって異なり、少なくとも三つのタイプがある。どの格で表示されるのか、(6)で示した三つのタイプを順に見ていく。

4.1 タイプ 1

まず、タイプ 1 を見ていく。(5c) の文型の場合、タイプ 1 では(1a) のように「生まれる人」を表示する格として、1 人称と 2 人称であれば対・与位格、3 人称と固有名詞と人間名詞であれば対格が現れる。(15) から(19) がその例である。

- (15) *nadə oldzi xoroŋ hoŋ dzitc.*
私(対・与位格) 生まれて 20 年 経った 「私が生まれて、20 年が経ちました。」
- (16) *tco(də) halə olsaŋni ?*
あなた(対・与位格) どこで 生まれた 「あなたはどこで生まれたのですか。」
- (17) *dzaŋnə olgə ſidze hajim ekədzə.*
彼女(対格) 生まれる とき 雷が 鳴っていた 「彼女が生まれたとき、雷が鳴っていました。」
- (18) *hakinə halə olsaŋno ?*
ハキ(対格) どこで 生まれた 「ハキはどこで生まれたのですか。」
- (19) *tcinə agunə halə olsaŋni ?*
あなたの 娘(対格) どこで 生まれた 「あなたの娘はどこで生まれたのですか。」

一方、文頭に「産む人の関係者」が現れる(5d) の文型は、タイプ 1 では非文である。同じ事態を表すには(20) のように動詞は *olə-* ではなく、*xəro-* 「出る」を使う必要がある。あるいは(21) のように、「産む人の関係者」を「産む人の関係者の家族」にする必要がある。

- (20) a. **nadə sundzi gə olo.*
私(対・与位格) 孫(ゼロ対格) 不定 生まれた 「私に孫が生まれました。」
- b. *nadə sundzi gə xəro.*
私(対・与位格) 孫(主格) 不定 出る
- (21) a. **hakinə ou gə oltc.*
ハキ(与位格) 男の子 不定 生まれた
- b. *hakinə kətə ou gə oltc.*
ハキの 家に 男の子 不定 生まれた 「ハキの家に男の子が生まれました。」

タイプ 1 の状況を整理すると、動詞 *olə-* が「生まれる」を表す場合、(5c) と(5d) の文型の「生まれる人」と「産む人の関係者」を表示する格は(22) のようになる。

- (22) a. 「生まれる人」 *olə-* 「生まれる」
対・与位格 = 1 人称、2 人称
対格 = 3 人称、固有名詞、人間名詞
- b. 「産む人の関係者」 「生まれる人」 *olə-* 「生まれる」
非文

タイプ 1 の「生まれる」を表す動詞 *olə-* は、格表示から他動詞と見てよい。

4.2 タイプ 2

次に、タイプ 2 を見ていく。タイプ 2 では、「生まれる」と「産む」を表す動詞として *olə-* のほかにも、漢語の「出生」を翻訳借用した *xər olə-* を用いることがある。これらが「生まれる」を表すとき、タイプ 2 はタイプ 1 とは異なり、(5c) の文型の「生まれる人」を表示する格として、1 人称と 2 人称であれば対・与位格とともに主格、3 人称と固有名詞と人間名詞であれば対格とともに主格を用いる。二つの格表示は自由交替の関係にある。(23) から(26) がそうである。

- (23) a. *nadə dadundə xər olsaŋni.*
私(対・与位格) 大塚で 生まれた 「私は大塚で生まれたのです。」
- b. *bu dadundə xər olsaŋni.*
私(主格) 大塚で 生まれた
- (24) a. *teodə halə olo ?*
あなた(対・与位格) どこで 生まれた 「あなたはどこで生まれましたか。」
- b. *tei halə olo ?*

あなた(主格) どこで 生まれた
 (25) a. *nogəṇə halə olo* ?
 彼(対格) どこで 生まれた 「彼はどこで生まれましたか。」

b. *nogə halə olo* ?
 彼(主格) どこで 生まれた

(26) a. *munə aḡunə dadundə olsəḡni.*
 私の 娘(対格) 大塚で 生まれた 「私の娘は大塚で生まれたのです。」

b. *munə aḡu dadundə olsəḡni.*
 私の 娘(主格) 大塚で 生まれた

(23)から(26)それぞれ b の文は、「産む」を表す文と同文であり、聞き手に誤解されるのではという疑問があるかもしれない。しかし、文脈、話し手が誰なのかなどの情報により、動詞 *olə-*が「生まれる」を表すのか、それとも「産む」を表すのかを間違えることはない。

タイプ 2 にはタイプ 1 とは異なり、(5d)の文型も用いられる。「生まれる人」が人間名詞の場合に限って述べるが、「産む人の関係者」を表示する格は(27)のように与位格である。他方、「生まれる人」を表示する格は、(27a)のそれは対格あるいは主格であるが、(27b)のそれは(23)から(26)を見ると(10b)で見た不定を表す *gə* が主格に後置されているのか、ゼロ対格に後置されているのか判断できない。

(27) a. *nədə sundzinə / sundzi olsəḡni.*
 私(対・与位格) 孫(対格)/ 孫(主格) 生まれた 「私に孫が生まれたのです。」

b. *nədə sundzi gə olo.*
 私(対・与位格) 孫(主格 or ゼロ対格) 不定 生まれた 「私に孫が生まれました。」

タイプ 2 の状況を整理すると、動詞 *olə-*が「生まれる」を表す場合、(5c)と(5d)の文型の「生まれる人」と「産む人の関係者」を表示する格は(28)のようになる。

(28) a. 「生まれる人」 *olə-* 「生まれる」
 対・与位格 / 主格 = 1、2 人称
 対格 / 主格 = 3 人称、固有名詞、人間名詞
 b. 「産む人の関係者」 「生まれる人」 *olə-* 「生まれる」
 与位格 対格 / 主格 = 人間名詞
 主格 *gə* or ゼロ対格 *gə* = 人間名詞

タイプ 2 の「生まれる」を表す *olə-*は、他動詞と自動詞両方の用法を持っていることになる。

4.3 タイプ 3

タイプ 3 を見ていく。動詞 *olə-*が「生まれる」を表すとき、(5c)の文型の「生まれる人」を表示する格は 1 人称と 2 人称であればタイプ 2 の(23)から(26)で見たように対・与位格あるいは主格である。しかし、「生まれる人」が 3 人称、固有名詞、人間名詞のとき、それらを表示する格は(29)と(30)のように主格に限られる。

(29) a. **dzaḡṇə dadundə olsəḡno.*
 彼(対格) 大塚で 生まれた 「彼は大塚で生まれたのです。」

b. *dzaḡ dadundə olsəḡno.*
 彼(主格) 大塚で 生まれた

(30) a. **munə aḡunə dadundə olsəḡno.*
 私の 娘(対格) 大塚で 生まれた 「彼の娘は大塚で生まれたのです。」

b. *munə aḡu dadundə olsəḡno.*
 私の 娘(主格) 大塚で 生まれた

(29a)と(30a)のような対格は再解釈され、(31)と(32)のように対比的な意味合いを持つようである。

(31) *dzaḡ nə dadundə olsəḡno.*
 彼(主格) 対比 大塚で 生まれた 「(他の人は知らないが)彼は大塚で生まれたのです。」

(32) *munə agu nə dadundə olsaŋno.*

私の娘(主格) 対比 大塚で 生まれた「(他の人は知らないが)私の娘は大塚で生まれたのです。」

文頭に「産む人の関係者」が現れる(5d)の文型については、情報を持ち合わせていない。

タイプ3の状況を整理すると、動詞 *ola-*が「生まれる」を表す場合、(5c)と(5d)の文型の「生まれる人」と「産む人の関係者」を表示する格は(33)のようになる。

- (33)a. 「生まれる人」 *ola-* 「生まれる」
 対・与位格 / 主格 = 1, 2 人称
 主格 = 3 人称、固有名詞、人間名詞
- b. 「産む人の関係者」 「生まれる人」 *ola-* 「生まれる」
 ? ?

タイプ3の「生まれる」を表す *ola-*は、タイプ2よりも自動詞に傾いている。

4.4 三つのタイプの違い

保安語積石山方言の動詞 *ola-*が「生まれる」を表すとき、(5c)と(5d)の文型の「生まれる人」がどの格で表示されるのかについて、三つのタイプを見てきた。整理すると、表2のようになる。

表2：保安語積石山方言の動詞 *ola-*が「生まれる」を表す場合

タイプ	タイプ1	タイプ2	タイプ3
他動詞か自動詞か	他動詞	他動詞 / 自動詞	他動詞 / 自動詞 タイプ2より自動詞的
(5c) 「生まれる人」			
1, 2 人称	対・与位格	対・与位格 / 主格	対・与位格 / 主格
3 人称、固有名詞、人間名詞	対格	対格 / 主格	主格
(5d) 「産む人の関係者」	非文	与位格	?
「生まれる人」			
人間名詞		対格 / 主格	?
		ゼロ対格 <i>gə</i> or 対格 <i>gə</i>	

5. 考察 — 他動詞から自動詞へ —

保安語積石山方言の「生まれる」と「産む」を表す動詞 *ola-*が「生まれる人」あるいは「産む人」をどの格で表示するのかを見てきた。格表示から、「産む」を表す動詞 *ola-*は他動詞であるが、他方「生まれる」を表す動詞 *ola-*は話者の居住地によって異なり、保安語積石山方言全体で見れば他動詞から自動詞への移行過程にあると言える。

文型の(5c)を保安語積石山方言の歴史の中で捉えると、三つのタイプに関する限り、タイプ1が保安語積石山方言本来の格表示((3)で示した同仁方言の状況から、保安語本来と言う方が適切ではある)であり、タイプ3がもっとも改新した姿を反映している。つまり、保安語積石山方言では動詞 *ola-*が「生まれる」を表す場合、その「生まれる人」を表示する格は元来1, 2 人称は対・与位格、その他は対格であった(タイプ1：他動詞)。しかし、その後それらは主格と自由交替するようになり(タイプ2：他動詞でもあり自動詞でもある)、さらに3 人称と固有名詞と人間名詞の対格は対比的な意味合いを持つ要素として再解釈され、主格だけが用いられるようになった(タイプ3：他動詞でもあり自動詞でもあるが、タイプ2よりは自動詞的)。

そしてこのような他動詞から自動詞への変化には、話者の居住地という社会的背景が関わっている。保安語積石山方言の古風な姿を持つタイプ1は、行き来があるとは言え数十年前に保安族の村を離れた話者によって用いられている。一方、改新的な特徴を持つタイプ2とタイプ3は保安族の村、大塚村で暮らしている話者によって用いられている。多数が暮らす地を離れた話者が常にではないが、その言語の古風な特徴を保持していることは決して珍しいことではない。とすれば、この変化それ自体はこの数十年ほどの間にはじまったことになるであろう。

では、なぜ保安語積石山方言では「生まれる」を表す動詞 *ola-*が他動詞から自動詞へと移りつつあるのだろうか。理由は単一的なものかもしれないし、複合的なものかもしれないが、今のところは可能性を指摘するにとどめておくのが無難であろう。保安語積石山方言の外にその要因を求めるなら、SOV 語順を持つ

当地の漢語との接触が変化の引き金として考えられる。保安語積石山方言の話者は当地の漢語を併用しているが、その漢語では「生まれる」を表す動詞は「生まれる人」を主格で表示する。たとえば、*ŋə dadunli ʂəŋ lio.* (私・主格 大墩で 生まれる 完了)「私は大墩で生まれました。」であり、対・与位格の *ŋa* が主格の *ŋə* に代わって現れることはない。あるいは保安語積石山方言のどのタイプの話者も漢語の *ʂi* 「是」を(34)のように主題、ないしは対比標識として借用しており、(34a)のような文が「生まれる」の自動詞化の促進に関与している可能性もあるかもしれない。

- (34) a. *bu ʂi dadundə olʂaŋni.* 「私はといえば、大墩で生まれたのです。」
 b. *bu ʂi munə amo olʂaŋno ja.* 「私はといえば、私の母が産んだのですよ。」
 c. *nə ou ʂi bu olʂaŋni.* 「この男の子は、(他の子は知らないが)私が産んだのです。」

6. おわりに

保安語積石山方言の「生まれる」を表す動詞 *ola-* はもともと「産む」を表す動詞 *ola-* のように他動詞²⁾であったが、現在、それは他動詞から自動詞へと変わりつつある。完全に自動詞に姿を変えるのかどうか注目される。その鍵を握っているのは、保安語積石山方言のもう一つの下位方言、甘河灘方言であろう。甘河灘方言は漢語化が一段と進んだ保安語であり、甘河灘方言の状況を知りたいところではある。

参考文献

- 布和 劉照雄(1982)『保安語簡志』民族出版社
 布和 陳乃雄(1981)「同仁保安話概要」『民族語文』2、61-75
 陳乃雄等編(1987)『保安語和蒙古語』内蒙古人民出版社
 Fried, R.W (2010) *A Grammar of Bao'an Tu, A Mongolic Language of Northwest China*, Ph.D. Dissertation, State University of New York at Buffalo.
 角道正佳(2018)「モンゴル諸語の「生まれる」を表す表現」日本モンゴル学会 2018 年度秋季大会
 Todaeva, B.X. (1964) *Baoanskij jazyk*, Moskva: Nauka.

参考資料

保安語積石山方言、保安語同仁方言、康家語、東郷語、土族語互助方言、土族語民和方言、東部裕固語における「生まれる」と「産む」：動詞と格表示の概略

東部 <i>ol-</i>
土互 <i>törö-</i>
土民 <i>törö-</i>
康 <i>törö-</i> 保積 <i>ol-</i>
東郷 <i>ol-</i>
保同 <i>ol-</i>

動詞：「生まれる」と「産む」の形式
 モンゴル文語の対応形
ol- 「得る」、*törö-* 「生まれる」

東部 Acc
土互 Acc-D
土民 Acc-D
康 Nom 保積 Acc-D
東郷 Nom
保同 Acc-D

格表示：「私が生まれた」の「私」
 Acc = 対格、Acc-D = 対・与位格、
 Nom = 主格

2) 保安語積石山方言の動詞 *ola-* が「生まれる」を表すとき、保安語本来の文型である[「生まれる人」- 対・与位格 or 対格 *ola-* (他動詞)]は何を反映しているのでしょうか。「生まれる」は、通言語的にも特別な表現を用いることが知られている。保安語積石山方言の場合、「生まれる」を表す動詞 *ola-* は本来自動詞ではない。自動詞で人間の出生を表すのは、適切ではないという認識があるのである。用いられているのは、他動詞の「産む」を表す文型から「産む人」が表されていない文型、つまりは「産む」が表す他動詞事象の一部分である。その一部分の「人を産む」を「生まれる人」に視点を置き捉えなおすと、「人が生まれる」となる。こうした点が動詞 *ola-* の「生まれる」を表す文型に反映されているのではないだろうか。